

生の感受へ

—東田直樹の詩・散文をめぐる授業—

大関 健一・青柳 宏

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

生の感受へ[†] —東田直樹の詩・散文をめぐる授業—

大関 健一*・青柳 宏**

真岡市立真岡西小学校*

宇都宮大学大学院教育学研究科**

作家である東田直樹(1992～)の言葉には、東田のもつ感受性が強く表れている。東田が詩として歌う「生の感受」の体験。それは自らを含む世界の感受であり、その喜びである。しかし、それは同時に、東田にとって、他者との感覚の違いから生まれる「苦しみ」の源でもあるように思える。また、それは、東田のアイデンティティでもあり、「自分の感覚をだれかと共有したい」という強い願いが生まれてくる源でもあると、私たち(大関・青柳)は考えている。本実践は、東田直樹の詩と散文を読み、その「生の感受」という位相において、東田の感性や苦しみにふれることで、子どもたち自身が「自己の生」について感じ、想いを巡らせることを目的とした。本実践をとおして、私たちは、東田直樹の作品との対話、授業中の子どもたちとの対話、子どもたちの綴った感想文との対話を繰り返してきた。そこに見えてきたのは、東田の感性に心ひかれ、他者の「苦しみ」や私たちのもつ「言葉」について、想いを巡らせる子どもたちの姿だった。そしてそれは、子どもたちが「自己の生」の感受へと向かっていった、ゆたかな学びの足跡でもあった。

キーワード：生の感受、苦しみ、感受性の地平、自閉症、言葉、自己の生

1. はじめに

はじめに、詩『星影もなし』を引用する。

星影もなし

星影はどこにできる
月影はどこにできる
喜びはどこにできる
苦しみはどこにできる
すべて深い謎のまま
心の闇の中
どんなに 光がさそうとも

すべての光は 闇の中

11才(小学5年生)

(東田,2008:p.85.)

「星影もなし」は、作家 東田直樹(1992～)が11才の時に綴った詩である。

世界を照らすどんな光も、11才の東田の「心の闇の中」へと消えていく。東田は世界にさす光も、心の闇も、闇の中から生まれくる喜びも、苦しみも、深い謎のままに、すべてをそのまま感受している。詩に表れてくる東田の精神世界。光が到来する自己の外と、謎に満ちた自己の内面、その間に境界はない。東田は、世界と無分節で、未知的な「自己の生」を、あるがままに感受しているように思える。それは喜びであり、苦しみでもある。

子どもたちをはじめ、誰もが自らの内に「心の闇の中」という地平をもっているのではないだろうか。東田は、そんな地平に立ち、「自己の生」の根源を感受する。私たちはそれを「生の感受」という言葉で表現したい。

[†] Kenichi OZEKI* and Hiroshi AOYAGI**: In Search of the Sensing (Suffering) of the Life: Lessons on Naoki Higashida's poetry and prose

Keywords: the Sensing(Suffering) of the Life
* Mokbanishi Elementary School of Moka

** Graduate School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: aoyagi@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

子どもたちの人間形成（あるいは心、またあるいは言葉を育むこと）について考えたとき、私たちはその表層、目に見える形に囚われ過ぎてはいないだろうか。

フランスの哲学者 M.メルロ＝ポンティは、著書『知覚の現象学』において、次のように記している。

「われわれは、言葉が制度化している (être institué) 世界のなかに生きている。(中略) その根源にまで遡らないかぎり、言葉のざわめきの下にもう一ど始元の沈黙を見いだして来ないかぎり、この沈黙を破る所作を記述しないかぎり、われわれの人間観は、いつまでも皮相なものにとどまるであろう。」 (メルロ＝ポンティ, 訳, 1967:p.302.)

子どもたちの心、言葉をよりゆたかに育むためには、私たち教師が「言葉のざわめきの下」、より根源的な地平へとアプローチしていく必要があるのではないだろうか。本実践は、言葉以前の地平、「生の感受」という位相にふれることを目指した。そこに生まれる学びが、子どもたちの「生」をよりゆたかに彩ってくれることを願って。

2. 実践に向けた授業構想

これまで、私たち（大関・青柳）は、矢沢宰（1944～1966）や宮沢賢治（1896～1933）の作品を教材とし、子どもたちがそれぞれの感受性をもって、他者の「生と死」や「世界」、自らを含む「森羅万象」と出合うことで、子どもたち自身が「自己の生」について想いを巡らすための授業実践を重ねてきた¹⁾。そして、「1.」においてふれたように、本実践もそれらの流れを汲むものである。

本実践では、東田直樹の作品を教材とした。以下、授業を構想するにあたり、意識した視点や東田直樹の作品を教材とした意図について記したい。

まず、東田直樹の著書『ありがとうは僕の耳にこだまする』から、著者プロフィールを引用する。

「東田直樹（ひがしだ・なおき）／1992年8月生まれ。千葉県出身。会話のできない重度の自閉症でありながら、パソコンおよび文字盤ポインティングにより、援助なしでのコミュニケーションが可能。小学校6年生から中学3年生まで養護学校で学ん後、2011年3月アットマーク国際高等学校（通信制）卒業。第4回・第5回「グリム童話賞」中学生以下

の部大賞受賞をはじめ、受賞歴多数。13歳のときに執筆した『自閉症の僕が跳びはねる理由』（エスコアール、角川文庫）で、理解されにくかった自閉症者の内面を平易な言葉で伝え、注目を浴びる。同作は国際的作家デイヴィッド・ミッチェルにより翻訳、2013年7月にイギリス版『The Reason I Jump』が刊行された。（後略）」

（東田, 2014:p.202.）

2. 1. 「生の感受」

自閉症という障害をもつ東田は、現在、作家として活動している。私たちは、以前から東田の作品に関心を寄せていた。特に、青柳はこれまでも、栃木県内の小学校における「詩の授業」の実践において、東田の作品を教材の一つとして取り上げてきた。そして、その実践の中においても、東田の作品に心ひかれる子どもたちの姿が多く見られた。

なぜ、東田の作品が子どもたちの心をひきつけるのか。私たちは、東田の作品に、言葉以前の東田自身のゆたかな感受性が表れていることが、その一つの原因ではないかと考えている。例えば、授業の中でも教材の一つとした作品に「風の歌」という詩がある。

風の歌

そよ風が ふくと みんなが春を感じる
風は木々の間を走りぬけ
みんなは暖かさに ほっとする
どこかで鳥が鳴く時 人は木を見上げる
どこかで桜が散る時 人は風に気づく
風が聞いてほしいのは ずっと遠くの海の音
ふうわりそよふく風の中
静かに耳をすましてごらん
風が教えてくれるのは
みんなの知らない 海の音
静かな風の歌だから

（東田, 2005b:p.12.）

「そよ風が ふくと みんなが春を感じる」という言葉で始まる詩「風の歌」。木々の間を吹き抜けるのではなく、「走り抜け」る風は、どこかそれを感じる「みんな」の身体感覚ともつながる印象を受ける。肌の感覚や聴覚、視覚によって風を感じる

人々。そんな人々に「ふうわりそよふく風の中／静かに耳をすましてごらん」と語りかける東田は、人々が意識している風という現象の奥、あるいはその意識以前の地平へと私たちを誘っていく。

東田は、自身の感じていることを純粹に表現することで、感受性の地平を私たちの前に開いてみせる。

先に引いたメルロ＝ポンティはまた、次のように記している。

「感覚の主体は、或る性質を書きとめる思惟者でもなければ、それによって影響されまたは変化させられるといった無生気な場でもなく、或る種の生存の場に、その場と共に生れつき (co-naître)、あるいはこの場と共時化されている (se synchroniser) ところの、或る能力なのである。(中略) つまり、感覚は文字どおりコミュニオン〔聖体拝領＝共生〕にはかならない。」

(メルロ＝ポンティ, 訳, 1974:p.15.)

メルロ＝ポンティは、分離された感覚的性質は反省的・抽象的次元においてあらわれるものであって、それら諸感官の分割に先立って、感覚することの＜原初的層＞があるとしている。そして、分割に先立つ共感覚的知覚が本来のものであって、私たちがそれに気づかないのは、科学的知識が具体的な経験にとってかわっているからだとする。

東田の言葉には、東田自身が＜原初的層＞において感受している共感覚的知覚が表れていると考える。それは思惟に先立つ「生」そのものの感受といえるのではないだろうか。

「生」そのものの感受ということをイメージするために、さらにスイスの心理学者C.G.ユングの著書『現代人のたましい』から引用をしたい。ユングが東アフリカのエルゴン山中に住むエルゴイニースという種族のところに滞在していたときのエピソードである。ユングは、種族の人々に神について問う。

「さて、adhistaという言葉は、同時に神と太陽という意味をもっているので、「太陽は神様なのかね?」と私はたずねてみた。彼らは一齊にわらってうち消した。なんとという愚にもつかぬことを訊くか、という顔付きである。ちょうどそのとき、太陽は空高く昇っていたので、私はそれを指さして、質問した、「太陽がここにいるときには、太陽は神様じゃ

ない、と君らはいう。ところが、太陽があっちの東のほうにいるときには、君らはあれは神様だという。」すると、みんなこまったような顔をしてだまってしまったが、やがて老人の酋長が口をひらいて、こういった、「そうなのだ。あそこの上にいる太陽が神様じゃないってことは、ほんとうだ。だが、太陽が昇るとき、それが神様なのだ (あるいは、そのときそれは神様なのだ)。」

(ユング, 訳, 1970:p.116.)

エルゴイニースという種族の人々にとって、夜と彼らの恐怖とが同じものであるように、太陽が昇る現象と、自らの内に起きる感動とが、同一のできごとであり、分けられることのない神々しいこととして感受されている。

諸感官の分割や、主－客の分割以前の地平、東田の詩には、そのような感受性の地平が開かれていると、私たちは考える。それはまさに東田自身の「生の感受」の体験そのものである。

私たちは、子どもたちが東田の言葉と向き合い、東田自身の「生の感受」という位相にふれることで、子どもたち自身もまた、「自己の生」について「感じる」ことができるのではないかと考えた。あるいは、そのような体験をとおして、自らの「生」について見つめ直す機会になるのではないかと。

2. 2. 普遍的な「苦しみ」

上に記したように、子どもたちが東田のように自分らしく「生を感受すること」。「自己の生」のゆたかさにふれること。それは、大きな喜びであると思われる。しかし、東田の言葉は、生の感受を歌ったものであると同時に、そこから生まれる「苦しみ」について語っているように思われる。「苦しみ」は、この「生を感受すること」と切り離せない。障害ゆえの苦しみ。それは当然あるだろう。ただ、東田ならではの「苦しみ」とは、生を感受することから必然的に生まれる、あえて言えば「普遍的な苦しみ」と言えるのではないか。私たちはそう考えた。

東田は、著書『自閉症の僕が生きていく風景』の中で、自閉症という障害と自分の思いについて、次のように綴っている。

「僕は、自閉症という障害に悩んでいたのではあ

りません。自分で自分のことをどう受けとめればいいのかわからなかったのです。／自閉症という診断を受け、みんなに近づくために訓練しなければならぬ毎日。普通の人への憧れと、僕は僕なのという思いの間で、気持ちはずも揺れ動いていました。／みんなが抱く未来像が僕の幸せなのか、パニックを起こす自分は何を求めているのだろう。／自分を見失ってしまいそうで、僕は恐かったのです。」

(東田,2020:p.85.)

東田が綴るように、東田の「苦しみ」は「自閉症という障害」自体ではないのだろう。

おそらく、他者との感覚の違いが、東田にとっての「苦しさ」の源であると同時に、自分自身のアイデンティティでもあり、また自分の感覚をだれかと共有したいという強い願いが生まれてくる源でもあるように思われる。また、繰り返しになるが、それは東田直樹の「生の感受」そのものでもある。

その「苦しみ」は、「自閉症という障害がゆえに」というよりも、一人一人が異なる感覚をもつ私たちや、子どもたちにとっても、ある程度、共通する部分があるのではないだろうか。

また、感覚の違いという「苦しみ」とともに、「生の感受」には、自己を越えたところから訪れ生じる「苦しみ」がある。私たちは、誰しもが生きている中で、他者や、自他を含む世界に出合う。その出会いとはときに、自身の世界の感受の仕方が変えられてしまうような「苦しみ」をともなうものでもある。ただ、そのような「苦しみ」があるがゆえに、その出会いの中で、新たな「自己」が生まれ、自らが育まれていくともいえる。

私たちは、東田直樹の「生の感受」という位相にふれることが、東田の「苦しみ」にふれることでもあると考えた。そして、他者の「苦しみ」にふれ、他者を想うこと、子どもたちが自らの「苦しみ」や、いずれ出合うであろう「苦しみ」に思いを巡らせることは、「自己の生」をよりゆたかに感じ取り、よりゆたかに育んでいく一助となるのではないかと考えた。

2. 3. 実践の流れ

生の感受へ

～東田直樹の詩・散文をめぐる授業～

今回、私（大関）は、真岡市立真岡西小学校（以下、真岡西小）の6年生の学級において、次に記すような3時間の授業を計画した。

生の感受へ

—東田直樹の詩・散文をめぐる授業—

第1時（2022年2月16日 5校時）

君が僕の息子について教えてくれたこと

～東田直樹との出会い～

第2時（2022年2月18日 5校時）

感受性の地平へ

～東田直樹の詩・散文を読んで～

第3時（2022年2月28日 3校時）

僕たちにとっての「言葉」

～言葉のない世界をめぐる～

（授業のタイトルについては、本稿の執筆にあたり、子どもたちの学びと感想文からまとめたものである。そのため、子どもたち自身はこれらのタイトルにはふれていない。尚、第1時の「君が僕の息子について教えてくれたこと」は、子どもたちに視聴してもらったDVDのタイトルをそのままお借りしている。）

3. 第一回目の授業

君が僕の息子について教えてくれたこと

～東田直樹との出会い～

以上のような授業構想にもとづいて、2022年2月16日 5校時、真岡西小の6年4組（出席者27名）において、第一回目の授業を実施した。

3. 1. 教材について

本時で教材とした東田直樹の詩と、DVD「君が僕の息子について教えてくれたこと」についてふりたい。

まず、東田直樹の詩「だから朝焼けは美しい」を引用する。

だから朝焼けは美しい

暗闇からオレンジの光

すっきり明るい色
細長く帯を広げたよう

どこまでが夜で
どこからが朝
その線引きのために
朝焼けはあるのだ

夜と朝の境
その境界線はどこ？
どうして一本の線で分けられない

だんだん夜は明けていく
少しずつ 少しずつがいいのだろう
人の心に沁みこむように
時の流れをのみこむように

朝焼けが引きよせる
命を
愛を
光を

だから朝焼けは美しい
(東田,2014:p.46-47.)

私たちは、この詩「だから朝焼けは美しい」を、第1時の一つ目の教材に選んだ。それは、東田の感受性がよく表れた詩の一つだと考えたからである。

東田の感覚をとおして感じられる朝焼けの光は、人の心や時の流れとの境界をもたない。それは、命に満ち、愛に満ち、より眩い光に満ちていく。まさに、東田が感じているのは、分かれることのない自らの生と世界の美しさそのものである。

それは、「2. 1.」で取り上げたエルゴイニースという種族のエピソードとも重なる。また「朝焼け」という現象は、子どもたちの日常の体験からそれほど遠くないように思えたことも、この詩を選んだ理由の一つである。

次に、詩とあわせて教材として取り上げたDVD『君が僕の息子について教えてくれたこと』についてふれる。

『君が僕の息子について教えてくれたこと』は、2014年8月16日にNHKで初回放映されたものを

DVD化したものである。以下、NHKアーカイブスの「NHK放送史」から詳細の紹介を引用する。

「日本の自閉症の若者・東田直樹さんの書いたエッセイが20か国以上で翻訳されベストセラーとなっている。英訳したのは、イギリスの作家デイヴィッド・ミッチェル氏。彼にも自閉症の息子がいる。東田さんの本を読んでまるで息子が語りかけているように感じたと言う。ミッチェル氏の訳した本は、自閉症の子どもを持つ世界の家族に希望のともしびをととした。日本の自閉症の若者と外国人作家の出会いから生まれた希望の物語である。」

授業者である私（大関）自身がDVDを教材にしたいと考えたのだが、実際には、第1時のその日まで、DVDを教材とすることに迷いがあった。映像には、東田自身の表現した言葉だけではなく、少なからず他者の意図が含まれるからである。別の情報が多く含まれる映像にふれることで、東田の詩や散文から、子どもたち自身が「感じる」ことの妨げになりはしないか、という迷いを抱いていた。もちろん、映像では、東田の言葉についてふれられているが、中心的な内容としては「自閉症」についてのメッセージが色濃く表れている。障害についての理解やそれを取り巻く環境について知ることでも大切な事である。ただ、3時間という授業の時間の中で、「生の感受へ」という目的を意識したとき、映像自体の子どもたちに与える影響が、幅広く多様なものであるように思えた。また、あるいは「自閉症」自体へと子どもたちの意識を限定的なものにしてしまうのではないかと感じた。

しかし、それでもまずは「東田直樹という一人の人間に会うこと」が「生の感受へ」の出発点だと思えた。

東田の感受性にふれ、子ども自身が「感じる」ことを大事にした授業を展開するためにも、第1時において、東田を取り巻く環境や人々の想い、「自閉症」について、子どもたちがふれることは必要なことだと考えた。

そして、そこから、子どもたちが何を思い、何を考えるか、何を感じるか、それ自体もまずは子どもたちに委ねる必要があると思えた。

3. 2. 授業の展開

授業前、6年4組の教室に入った私は、まず、教室のカーテンを開けることから始めた。子どもたち数名が、カーテンを開けることを手伝ってくれた。「感じる」ということを大切にすることも、東田の言葉を読むためにも、「光」が必要な気がした。

授業開始5分前の13:45。授業を始めるにあたり、授業者である私はギターを演奏し、歌を歌った。以下がその歌詞である。

君の声

ねえ 君の声 聴かせてよ 聴かせてよ
どんな 喜びも 悲しみも つまっている
光の分子が 僕と君の間
弾けて飛ぶように 満たしていく

君の声が 世界を彩る
君の歌が 世界を祝うだろう
君の声を 聴かせて

子どもたちが、自分の感じることを大切にできるよう、授業者である私自身の感覚を自らの音楽と詩、声で、子どもたちへ向けて開こうと考えた。

また、特に歌詞の前半部分が、数年前、東田直樹の詩「光の中へ」に心ひかれて書いたものであることも理由の一つだった。

歌い終えた後、子どもたちに「この曲をつくるにあたって、影響を受けた作家さんがいました。」と伝え、「東田直樹」という名前を黒板に書いた。

簡単な説明をした上で「だから朝焼けは美しい」を配布し、朗読をした。

詩から感じたことを、友達と交流し終えたのは13:55だった。その後30分間、映像教材『君が僕の息子について教えてくれたこと』を視聴した。



とても印象的だったのは、画面を食い入るように見つめ視聴する子どもたちの姿だった。キーボードを打ちながら言葉を紡ぐ東田を見つめ、そのリズムに合わせるように、身体が前後に動くS.Y.さん。映像の場面の切り替わりで、我に帰るように姿勢を整えるH.E.さん。子どもたちは、映し出される東田の姿と、ナレーターによって朗読される東田の言葉に、心を奪われたような様子だった。

視聴開始から30分経った14:25。映像を止め、最後の10分間で感想を書いてもらった。

3. 3. 映像教材『君が僕の息子について教えてくれたこと』についての感想文との対話

詩を読み、映像資料を視聴し、東田直樹に出会った子どもたちが書いた感想には、子どもたちそれぞれの想いや疑問が綴られていた。以下、子どもたちが授業の最後に書いた感想文を掲載する。そして改めて、それらの言葉と対話を重ねていきたい。(以下、太字…子どもの感想、子どもたちの感想については、すべて「原文のママ」である。)

Y.R.さんの感想

重度の自へいしょうの東田さんがキーボードを使うと話せることにおどろきました。自分がやりたいことと行動がちがったり、周りからの視線が怖いなど、自へいしょうの方から直接話を聞けるのは、きちょうな事だと思いました。ミッチェルさんは東田さんの本を読んでから、息子への考え方が変わり、東田さんの本はすごいえいきょう力があることが分かりました。東田さんについてもっと深く知りたいと思いました。

Y.R.さんの感想には、自閉症についての事実と東田の言葉の影響力が、驚きとともに綴られていた。そして、最後に「東田さんについてもっと深く知りたい」と書くことで感想を終えている。

私（大関）自身、東田のことを知ったとき、同じように感じたことを思い出す。「もっと知りたい」と、東田直樹という人間が見ている世界にひかれた。知りたいといっても、何か知識を得るように知ることを求めたのではない。また、「同じように感じたい」ということとも違う。その世界に「ふれたい」というわけでもない。ただ、東田直樹の感受している地平にひかれている自分がいた。そして、一人一人の

世界の違いに想いを馳せたとき、人間を含む世界、森羅万象のあまりの広がりには恐怖すら感じたことを覚えている。

そして、何より、一人一人の感性が異なるということを感じさせてくれる東田の言葉に、自分自身の感性を、「そのまま」でいいと肯定されたような気持ちになった。

I.M.さんの感想

東田直樹さんは、自分の感じようをコントロールできないのに、本を作ったりしていて、とてもすごい人だなと思いました。じへいしょうというのは、聞いたことはありましたが、どういうものかは、分かっていませんでしたが、今日分かりました。また、自分の気持ちが伝えられないと、親に心配をかけてしまいそうですが、パソコンなどで気持ちを伝えることができるのは、いいなと思いました。私はじへいしょうではないので、分かりませんが、きっと直樹さんや、他の人たちは、不安に思うことはたくさんあると思います。それでもしっかり生きているので、とても強い人なんだなと思いました。これからがんばってください。

I.M.さんの感想にも、自閉症について初めて知ることが綴られていた。そして「私はじへいしょうではないので、分かりませんが」とした上で、「きっと直樹さんや、他の人たちは、不安に思うことはたくさんある…それでも…とても強い人」と他者の心を慮っている。

自分との違いや、他者のもつ不安や苦しみに思いを巡らし、敬意を抱くI.M.さん。このような感想をもった子は少なくなかった。『君が僕の息子について教えてくれたこと』という映像は、自分と他者の違いや、他者の内面へと心を誘うのかもしれない。

私が、最初に『君が僕の息子について教えてくれたこと』を視聴したのは、宇都宮大学教職大学院における授業の中だった。私は、そのとき、これまでの自身の教師としての在り方を、深く反省した。これまで、ともに過ごした子どもたちの姿を思い出し、一人一人の感覚の違いに想いを馳せた。どれほど一人一人を大切にしていなければならないのかと。そしてそれは、自分自身の他者に対する「畏敬の念」の深まりへとつながっていった。

次に取り上げるT.H.さんの感想も、東田の言葉

から気づきを得て、「他者への敬意」へと想いが広がっているように思える。

T.H.さんの感想。

自分は自へいしょうの人をたまにみかけるときがあります。それで、自へいしょうの人がよくわからない行動をしているのを見てなにをやっているんだろうと良く思っていました。でもこのDVDを見その行動には、なんらかの意味があることを知りました。東田直樹さんが自へいしょうについて言ってくれて自分よりはるかに大変な人生を送ってきたことどれだけががんばってきたかがわかりました。

「行動には、なんらかの意味がある」と知ったT.H.さん。はじめには「よくわからない行動」と、率直に自分のこれまでの見方を書いている。しかし、これまで見えなかったものへの気づきが「自分よりはるかに大変な人生」という「他者への敬意」へとつながっていく。

他にも、敬意を抱く子は多く、次に紹介するY.R.さんは、より明確に「尊敬しました。」と書いている。

Y.R.さんの感想

まだ、じへい症の方と会ったことは無いけど、自分の感情をコントロールできなくても心では、“こうしたい”などがあるということが分かり、まずはじへい症の方の気持ちを分かちあえることが大切だと分かりました。主にじへい症の方は100人から1人の確率ということであまり少なくはないと感じました。そんな中で東田直樹さんは難しいとされる自分の気持ちを伝える努力をされていて尊敬しました。けれど、東田直樹さんが自分の気持ちを伝えられるようになったのも、周りの環境が整っていて、周りの家族など、たくさんの方々に支えられていたからでもあるのかなと考えました。

Y.R.さんは、東田の努力に対して、尊敬の念を表した後、感想文の後半において、東田を支えている家族や環境にまで視野を広げた。これはまさに、共に過ごす家族や、東田の言葉によってつながる人々の姿が描かれた映像教材だったからこそその感想だと言えるだろう。

I.R.さんの感想

言葉はうまく話せないけど7才で字や文を書くのはすごいと思った。丸い物を見てしまうのはなぜだろうか？と思った。なぜ物を思い出してしまうのかわからなかった。悪いことのように思うかもしれないけど直樹さんは、出来ないことと出来ることが反比例しているように思いました。

I.R.さんは、毎時間、東田の感性和自分の感性との違いや似ているところについて語っていた子である。第1時では、丸い物を見てしまうのはなぜだろうか？と、率直に東田の感覚について関心と問いをもっていった。

また、I.R.さんの感想は「反比例」という言葉が印象的である。I.R.さんのいう「出来ないこと」、それはまさに、自閉症という障害や東田の他者との感覚の違い、そこから生まれる「苦しみ」につながるものだろう。そして「出来ること」とは、東田の他者との感覚の違い、まさに「生の感受」という位相とつながり生まれる詩や散文、東田自身の言葉そのものではないだろうか。それらは同じ地平から生まれるにもかかわらず、「苦しみ」と「喜び」という反する姿をもって立ち現れてくる。I.R.さんの「反比例」という言葉は、東田の内面を想い、それをI.R.さんらしく、I.R.さんならではの言葉で表現したものであるように思える。

次に紹介するN.A.さんは、I.R.さんの言葉を借りるなら、東田の「出来ること」に強く心ひかれた感想を残している。

N.A.さんの感想

自閉症の人が、どのように、どんなことを考えているかなどを、知れました。自閉症で、伝えたりするのが難しくても、いっしょうけんめい伝えようとしてたりするのが、いいなと思いました。東田直樹さんが、書いた本は多くの人を救っているんだなと思いました。文章を書くのが上手で、選ぶ言葉が一つ一ついいんだなと思った。東田直樹さんは「そのままがいいと思う。」みたいに、相手がほしい言葉がくれるんだなと思った。東田直樹さんが書いた本を読んでみたい！！すごい作家さんになるんだなと思った！！

東田の著書『自閉症の僕が跳びはねる理由』が世

界中で人々の心を救っていることにふれ、東田の紡ぎ出す言葉について「選ぶ言葉が一つ一ついいんだなと思った。」と綴るN.A.さん。自らの「言葉」に向き合う東田の誠実な想いを感じ取っているような感想である。

後半の「東田直樹さんは「そのままがいいと思う。」みたいに、相手がほしい言葉がくれるんだなと思った。」とは、映像の中の一場面について書いたものである。

「そのまま」という言葉。それは、自閉症の息子をもつ作家デイヴィッド・ミッチェルから「息子のために何が出来るか」という質問を受けた東田が、文字盤ポインティングをしながら自らの声で直接ミッチェルに伝えた言葉だった。

東田の言葉は、「生の感受」から生まれる苦しみ、喜びと、強く結びついているように思える。だからこそ、その言葉は他者へと向けられる温かなやさしさに満ちているのではないだろうか。N.A.さんの感想文には、そんな東田の言葉の内にある温かさにひかれる気持ちが表れているように思える。

東田の贈る言葉に心ひかれていた子は他にも多くいた。例えば、K.A.さんの感想。

K.A.さんの感想

自閉しょうの東田直樹さんが、自閉しょうのむすこさんのために、ぼくはそのままがいいと言って、言葉をちゃんとだして、感想を言ってくれて、すてきなしだなと思いました。世界中の多くの人たちに、言葉をおくってくれていいと思いました。(後略)

また、東田の言葉に温かなやさしさを感じたのは子どもたちだけではなくだった。後日、自主研修として映像を視聴した同僚教師もまた、東田の「そのまま」という言葉にふれ、涙を流していた。

詩や散文とはまた違った、東田自身の声で大切に、丁寧な、他者へと贈られた言葉。そのような言葉にふれたこと自体もまた、子どもたちにとって、東田直樹という一人の人間の感受性に想いを馳せる体験だったのではないかと考える。

H.N.さんの感想

コミュニケーションは心を通じて話すような感じだと思いました。直樹さんはうまく話すことができ

ないけど、キーボードを打つように話すというのはすごい方法だと思いました。

コミュニケーションは「心を通じて話すような感じ」だと書いたH.N.さん。H.N.さんの言葉は、東田の言葉が言葉以前のゆたかな世界と結びついていること、言葉とは異なる位相にコミュニケーションの根源があることを、直感的に綴ったものであるように思える。

第1時において、子どもたちは映像をとおして東田直樹と出会った。そしてその出会いは、自閉症という障害、東田の感性、そこから生まれる言葉との出会いでもあった。

4. 第二回目の授業

感受性の地平へ

東田直樹の詩・散文に向き合って

第1時をとおして、「生の感受」の入り口に立った子どもたち。大関は、2022年2月18日の5校時に、6年4組（出席者28名）において、第2時の実践を行った。第1時の実践後、私たちはリフレクション（授業についての振り返り・省察）を実施し、子どもたちの感想文をもとに、改めて教材として取り上げる詩・散文を選んだ。以下、第2時の授業「感受性の地平へ ～東田直樹の詩・散文を読んで～」についてみていきたい。

4. 1. 教材 東田直樹の詩・散文について

私たちは、第1時の学びを土台として、子どもたちが「生の感受」という位相にふれるような授業を考え、第2時の教材研究に取り組んだ。

私たちは、東田の詩を、あえて（比喩的に言えば）「叙情詩」としてではなく、「叙事詩」として読むことができたらと考えた。

東田自身の想いやメッセージ、感じたことを読み取るように、詩や散文を読むのではなく、詩や散文を読むことで、子どもたちが、自分の感性と東田の感性の違いのようなものを感じることができたらと話し合った。それは、東田の言葉に出合うことで、ある意味、東田の感性を鏡に、子ども自身が自分の感性を見つめるということ。そのために、何より、東田の詩と散文を楽しく味わえるように。東田の心の世界にふれられるように。子どもたち自身が「感

じる」ということを大切にできたらと考えた。

また、あえて言うならば、障害の有無を越えて、東田直樹という一人の人間の言葉を感じることができたら、「自己の生」に潜在しているもの、それぞれが自己の内にもつ感受性に気づくことができるのではないかと思えた。

そのためには、東田直樹のどの言葉を教材とすればよいか。私たちは互いに詩と散文を提案し合い、少しずつ教材を決定していった。

以下、そのような考えのもと、私たちが教材とした詩と散文を引用する。掲載順は、実際に授業で子どもたちとともに読んでいった順序である。ここでは、各詩と散文について、授業者としての意味づけや解釈を記すことはさけない。東田直樹の言葉にそれぞれの感受性をもって出合っていたら幸いである。

よく自閉の子が光をじっと見たり、手をひらひらさせたりするのは、その光の粒に見とれているのか、光の粒と遊んでいるのか、どちらかだと思います。／光と遊ぶなんてよく分からない。と普通の人は思いかも知れませんが、僕たちは光を見ている時、なぜか自分も光になっているのです。自分が光になって光の粒を体に取り込んだり、粒の中に入ったりして光と遊ぶのです。／たくさんの光の粒は、静かに降る雪の中で一人たたずんでいる時のように、僕の周りを白一色ではなく金色でいっぱいにします。

光の中にいるだけで僕はとても幸せで、心が充たされるのです。

（東田,2005a:p.55.）

緑色

僕は 緑色

君は 赤

あなたは 白

彼は 黄色

彼女は 黒

このくらいはわかるでしょう

緑が いちばんきれいでしょ

だから 僕が緑色

（東田,2005b:p.16.）

春の色

頑張るのは ピンク色
みんなの 瞳の色だから
輝くのは 緑
みんなの 両手の色だから
すばらしいのは 茶色
みんなの 立派な足だから
春の色は 楽しい色
春の色は桜色

(東田,2005b:p.24.)

風の歌

そよ風が ふくと みんなが春を感じる
風は木々の間を走りぬけ
みんなは暖かさに ほっとする
どこかで鳥が鳴く時 人は木を見上げる
どこかで桜が散る時 人は風に気づく
風が聞いてほしいのは ずっと遠くの海の音
ふうわりそよふく風の中
静かに耳をすましてごらん
風が教えてくれるのは
みんなの知らない 海の音
静かな風の歌だから

(東田,2005b:p.12.)

みんなは物を見るとき、まず全体を見て部分を見ているように思います。しかし、僕たちは、最初に部分が目にとびこんできます。その後、徐々に全体が分かるのです。

どの部分が最初に目に入るのかは、その時の状況で違います。色が鮮やかだったり、形が印象的だったりすると、それに目がいってその部分一点に心が奪われて、何も考えられなくなるのです。

物はすべて美しさを持っています。

僕たちは、その美しさを自分のことのように喜ぶことができるのです。どこに行っても何をして、僕たちは一人ぼっちにはなりません。僕たちは、ひとりに見えるかも知れませんが、いつもたくさんの仲間と過ごしているのです。

(東田,2007:p.80-81.)

大きな耳

象は大きな耳なのに
人間の言葉はわからない
アリは小さな耳なのに
アリの話が聞こえてる
みんなふたつの耳をもつ
大きさも形も働きも同じ

ふたつの耳

もし たくさんの耳がついていたなら
人はやさしくなれるの
地球の上には たくさん耳があるのに
だれもが両手でふさいでいる

(東田,2005b:p.8-9.)

しずくが僕を包む時

どうしようもなく寂しくて
好きな音楽に身をゆだねる
僕と同じ言葉のない世界

空気をはじくような
うきうきした音符が
僕の体をすり抜ける
僕には 似合わない
明る過ぎるリズム

外は雨

しとしと雨のしずく
いつまでもかれない涙のように
僕の心にしみてくる

しずくは涙を誘う
じっと見つめる僕の目に
大粒の涙

しずくが僕を包むとき
僕は自然と涙する
その時僕は雨になる
そして雨は僕になる

(東田,2014:p.18-19.)

僕が木だったら

誰かが僕に声をかける
「なんてきれいな緑色！」
そしたら僕は有頂天
どんな時でも緑色
春はもちろん緑色
暑い夏も 枯葉の秋も
寒くて凍える冬だって
いつも僕は緑色
もしも 僕が木だったら

僕の自慢の緑色で
この地球を綺麗に飾る

(東田,2014:p.76-77.)

僕にとって水彩絵の具は魔法でした。違う色の絵の具を混ぜると、色が変化します。赤と青で紫、赤と白でピンク、黄色と赤でオレンジ、黄色と青で緑、自分で色を混ぜて新しい色をつくることは快感でした。

絵の具で色を塗っている時、僕は色そのものになります。目で見ている色になりきってしまうのです。筆で色を塗っているのに、画用紙の上を自分が縦横無尽に駆けめぐっている感覚に浸ります。

(東田,2020:p.97.)

光の中へ

光の中へ
ただ 光の中へ
僕は入りたい
たとえ そこが
現実の世界でなくても

光が僕を誘う
僕の分子を呼ぶ
細胞のひとつひとつが
光に向かって伸びていく

この手が
この目が
光をつかまえる
一瞬の喜び

どこにでも光はあるのに
僕が望む 真実の光は
永遠に
存在しない

(東田,2014:p.10-11.)

4. 2. 授業の展開

大関は、第1時と同じように、授業開始前にギターを演奏し、歌を歌った。その後、黒板に「東田直樹詩と散文を読んで」と書き、教材として選んだ詩と散文を配布した。

本時のおおまかな流れを伝え終えた13:55、電子黒板に、詩と散文にあわせた写真を映し出しながら、朗読を開始した。

一つ目の光に係わる散文を読んだ後、「みんなはどう感じる。みんなには光ってどう見えてる。」と問うと、I.R.さんが「なんか、(東田の感覚が)分かる気がする…。」とつぶやいた。驚くまわりの友達。I.R.さんは「光の粒、なんとなく分かる…。」と続けたが、その後は言葉にならなかった。

二つ目の詩「緑色」では、詩を読んだ後、子どもたちに「東田さんは「緑色」が好きなんだね。東田さんは自分のこと「緑色」と言っているんだけど、みんなは何色が好きですか。あるいは自分の色は何



色ですか。」と問いかけた。

好きな色については答えられるが、自分を色で表すということはあまり経験がないだろう。少し戸惑う様子が見られた。それでも「青かな…。なんか落ち着く。」と、H.E.さん。「ピンク、元気だから」「白」「緑」…と、子どもたち同士で互いの色についての話が広がっていった。

四つ目の詩「風の歌」では、それぞれ目を閉じ、耳をすませた。教室に満ちる沈黙。

子どもたちが目を閉じているまま、「[みんなの知らない 海の音] ってどんな音だろうね。」と問いかけた。目を開けたH.E.さんが、ためしに声を出してみた。それをきっかけに何人かの子が、「海の音」を声にしようとした。いくつかの声を聴いた後、S.Y.さんが一言つぶやく。「声に出して言えるなら、知っている音になるんじゃない。みんな知らないから、知らない音なんじゃない。」

しばしの沈黙。子どもたちは、言葉にはできない音について、想いを巡らせているようだった。

詩と散文の朗読を終えた後、子どもたちに自分の好きな詩を選んでもらった。どれを選んだか友達と共有した後、数名の子どもたちに朗読をしてもらった。

最後は10分間、本時を振り返り、感想を書いてもらい、授業を終えた。

私（大関）は、子どもたちが、自分と東田さんの感覚の違いや、似ている点を感じるところから、東田の心の世界にふれることができたかと考えながら授業を行った。

4. 3. 第二回目の授業における感想文との対話

授業後に子どもたちの感想文を集めた。子どもたちの多様でゆたかな感じ方や考えが綴られた感想文との対話は、私たちにとって貴重な学びの機会となった。子どもたちの感想文との対話を記す。（以下、太字…子どもの感想、子どもたちの感想については、すべて「原文のママ」である。）

子どもたちの感想には、東田が感じている色や光、その美しさを綴った言葉に心ひかれたものが多くあった。

S.Y.さんの感想

心に残った作品が二つあります。一つ目は、「僕が木だったら」です。自分が木だったら…なんてことはふつうの人は考えないと思うし、「この地球を綺麗に飾る」という言葉の「地球を」という言葉のところで一つ思ったことがあるからです。それは、「地球に飾る」ではなく「地球を飾る」にしていることです。地球全てを綺麗にしたい思いが伝わりました。二つ目は、「光の中へ」です。この詩にある「真実の光」は、東田さんにとって望む世界のことでないかなと色々考えさせられたからです。…

S.Y.さんは、東田ならではの感覚と、東田の「地球」への想いに心ひかれている。「に」と「を」という助詞の違いに着目し、イメージをふくらませながら、東田の地球、自然、命への想いを感じているように思える。いきいきとした感受性にひかれるとともに、後半には、詩「光の中へ」の言葉について考えを巡らせている。S.Y.さんは「真実の光」とは東田にとっての「望む世界」ではないかと考える。「真実の光」が何を表しているか、ここでそれを意味づけることはさげたい。ただ、S.Y.さんが「僕が望む／真実の光は／永遠に／存在しない」という東田の「苦しさ」に想いを馳せていることが伝わってくる。

H.Y.さんの感想

わたしがいいなと思った詩は、光の中へです。理由は、どうして、東田直樹さんの望む光は、永遠に存在しなくて、その光は、どんな光なんだろうと、思ったからです。／ほかに、緑色で、僕は、緑色と書いてあって、その理由が緑色がいちばんきれいだからというのもいいなと思いました。

H.Y.さんも、東田の望む「光」について考えている。どうして存在しないのか。それはどんな光なのか。H.Y.さんの中に問いが生まれている。思考の次元では捉えきれない「真実の光」について想いを巡らせることで、H.Y.さんは、詩をとおして東田の内面へと歩み寄ろうとする。

また、「緑色がいちばんきれいだからというのもいいな」と、純粹に東田の感受性に好感を抱いていることも印象的である。

次に、詩「緑色」を「良いな」と受け止め、そこ

から一人一人の「違い」について目を向けていったU.M.さんの感想を紹介したい。

U.M.さんの感想

…また、自分のことや、相手のことを色で表しているのも、良いな、と思いました。人によって見た目や、性格がちがうからこそ、人のことを色で表すことができるのかなと思いました。

授業中、私たちは互いの色について語り合った。担任である田村翔太先生は、自分を「オレンジ」と表現した。教室の掲示物にオレンジが使われていることに気付いた子どもたち。子どもたちそれぞれの色、そこに教師も一つの色として彩りを添えていく。教室がかげがえのない色で彩られているという感覚を抱く温かな場面だった。東田がそうであるように、子どもたち一人一人にも、それぞれの感じ方がある。その「違い」について感じられた時間だったのではないだろうか。

詩「緑色」については、H.N.さんも率直に「いいな」と好感を示している。

H.N.さんの感想

私は緑色という詩がいいなと思いました。緑色も好きなので、直樹さんは緑色が好きだったのかなと思いました。直樹さんは、タイヤに見入ったのは、タイヤの形が印象的で美しかったのかなと思いました。光の中へという詩は、光がつかまえられるように感じたのかなと思いました。

H.N.さんは、「好きだったのかな」「印象的で美しかったのかな」「感じたのかな」と、東田の内面を慮っている。「～かな」と、自問自答しながら判断に迷う、問いの形をとっているH.N.さん。論理や理屈で意味づけ、捉えることができない他者の感覚を、問いかける形で、分からないまま、そのまま受け止めようとしているように思える。学校教育においては「分かること」が重視される。しかし、他者という存在をはじめ、多くのことは分かりつくすことのできない未知的なものである。分からないことに分からないまま向き合う、その根底には「他者、世界は人間の理解を越えたものである」という畏敬の念があるのだと考える。繰り返される「～かな」は、H.N.さんが「直樹さん」や「直樹さんの感性」に

ひかれ、大切に思う気持ちを抱いていることの表れではないだろうか。

次に取り上げるY.R.さんの感想は、東田の感性にふれ、自らの感覚について綴るとともに、「聞くということ」や「世界の悲しさ」について想いを巡らせている。

Y.R.さんの感想

雨を見ていると何となく気分が下がるけど、それと同時に心が置ちついて冷静になれる気がします。／「大きな耳」という詩はとても印象に残り、最後の「地球の上にはたくさんの耳があるのにだれもが両手でふさいでいる。という文が気になり、たくさんの助けを求める声などがあるのにだれもが両手で耳をふさいでいるため、助けを求める声などが聞こえないので、世界はとても悲しいものなんだと感じ、強く印象に残りました。

詩「大きな耳」は、思惟的な面のある詩である。Y.R.さんは「助けを求める声」が聞こえない、聞こうとしない世界に、悲しみを感ずる。

東田の「もし　たくさんの耳がついていたなら人はやさしくなれるの」という言葉も印象的である。耳があるだけでは「やさしく」なることはできないのだろう。聞かなくてはいけないのは、表面上の言葉ではない。

Y.R.さんの感想文を読むと、授業中に子どもたちが「みんなの知らない　海の音」に耳をすませたことを思い出す。子どもたちは東田の聞いている海の音、東田の感受性、東田の想いに耳をすませた。

次に紹介するS.K.さんやN.M.さんは、「聞くということ」について、より感覚的な部分を言葉にしている。

S.K.さんの感想

東田直樹さんの詩を読んで、自分では感じないなと思う言葉も多くあり、自閉しょうの方はこう感じているんだなと思いました。／「風の歌」という詩がいいなと思いました。私も自然の音を聞くのが好きなので、なんか分かるなという気持ちで聞いていました。…

N.M.さんの感想

ふしぎな感じがした。／風の歌がいいなと思った。風の音を聞いたりしている時とかに、風の音だけじゃなくていろんな音が聞こえてくる。東田直樹さんは、いろいろな思いつくのがすごいなと思った。

東田直樹の言葉が感受性の地平を開いてくれることを、子どもたちの感想からも感じることができる。N.M.さんが書いたように「ふしぎな感じ」という地平。

次のH.Y.さんも、東田の言葉から、人の「違い」や、その「不思議」について思い、自分の感覚を綴っている。

H.Y.さんの感想

詩や散文を読んで思ったことは、人の考えるちがう見えかた聞きかた思うことがちがうことがとてもいいと思ったし不思議な考えだなあとも思う。詩を読んでみると最後に悲しいようなときがある。自分も詩と同じ感情になってくる。自分をなにかにたとえたりなりきったりしたりすることが詩にある。

「最後に悲しいようなときがある」、「詩と同じ感情になってくる」というH.Y.さん。東田の感受性にふれ、それぞれの「違い」のよさを感じると同時に、そこに生まれている「悲しみ」にふれている。他者の悲しみが自分の内に流れ込んでくるかのような感想。「詩と同じ感情になってくる」H.Y.さんの感性が表れた言葉だと感じた。

最後に、詩「しずくが僕を包む時」をめぐる感想文を取り上げたい。子どもたちは、それぞれの感じ方で、この詩に出合っている。とても多くの子が、この詩にひかれていた。

T.K.さんの感想。

自分のちがう世界で書いていると知り、ました。自閉症が光をじっと見るのは、見とれているか、遊んでいるかっていうのも知りました。私は、「しずくが僕を包む時」が好きです。自閉症から見たらしずくて、いろいろな見え方があると分かった。／詩と散文を読んでみて、自分が知らなかったことや、見え方がぜんぜんちがうと分かりました。すごいな～と思いました。

S.A.さんの感想。

色々な詩を読んでとてもいいと思った文が「うきうきした音符」と言うところがよくて、雨が降ったときかさをひらいてかさにあたる雨が私にとってうきうきした音符と思いました。

U.M.さんの感想

…とくに私が好きな詩は、「しずくが僕を包む時」です。自分の心の中や、雨、しずくの話が、とても関係していて、雨が好きなんだなあと思いました。

I.M.さんの感想

しずくが僕を包む時の詩を読んで、私は「僕と同じ言葉のない世界」という文が、とても心に残りました。これを読んだ時、自分が思いをあらわせることができないから、こういう文をかいたのかなと考えました。しずくが僕を包むとき、「僕は自然と涙する」というところは、直樹さんが自分のなみだに包まれているのかなと思いました。…

「自分の心の中や、雨、しずく」が関係していると綴ったU.M.さん。「直樹さんが自分のなみだに包まれているのかな」というI.M.さん。

「2. 1.」でも取り上げたメルロ＝ポンティは、著書の中で以下のように記している。

「天空の青をながめる私は、無世界的主体としてそれに向き合っているのではない。私はそれを思惟のなかで所有するのではない。私はそれをまえにして、その秘密を私にあかしてくれるような青の観念をくり広げるのではない。私はそれに身をゆだねる。私はこの神秘のなかへ入りこむ。それが「私のなかで己れを思索する*」のだ。私は、集中し静思しそして対自的に存在しはじめる空そのものである。私の意識はこの無限の青によって満たされる。」(メルロ＝ポンティ, 訳, 1974:p.19-20.)

自分が対自的に存在しはじめる「しずく」そのものである。身をゆだね、神秘のなかへ入り込む。メルロ＝ポンティの言葉は、東田の綴る「しずくが僕を包むとき／僕は自然と涙する／その時僕は雨になる／そして雨は僕になる」ということをイメージする助けになるのではないだろうか。

U.M.さんやI.M.さんは、それぞれ表現や解釈は

異なるが、そんな感覚的な部分、東田の感受性の地平にひかれているようにも思える。

また、詩「しずくが僕を包む時」については、違った視点から、感想を書いた子が見られた。それは「言葉のない世界」についての感想である。四人の感想文を引用する。

N.A.さんの感想。

東田直樹さんの考え方とか、思っていることとかの、世界かんががすごくいいなと思った。(中略)「しずくが僕を包むとき」の僕と同じ言葉のない世界という言葉がすごく好きです。…

I.R.さんの感想

東田直樹さんと私はすこし同じ似たような所があるかもしれないと思った。／私が言葉の無い世界に産まれたらだれか知らないなにかに せかされているように感じると思います。…

H.E.さんの感想

言葉のない世界があったら、自分の気持ち相手の気持ちが理解できず、考えることができなくなってしまうと思った。…

T.K.さんの感想

もし言葉がなかったら、色がたくさんあって平和だと思う。言葉はないけどきっとコミュニケーションはしぜんととれると思う。…

「僕と同じ言葉のない世界という言葉がすごく好きです。」というN.A.さん。

I.R.さんは、東田と自分は「すこし同じ似たような所があるかもしれない」とした上で、「私が言葉の無い世界に産まれたらだれか知らないなにかにせかされているように感じると思います。」という。I.R.さんは、第1時において「丸い物を見ちゃうのはなぜだろうか?と思った。なぜ物を思い出してしまうのかわからなかった。」と、東田と自分の感性の違いについて綴っていた子であるが、第2時では、授業中から東田と自分の感性の似ているところについて語っていた。

H.E.さんも「自分の気持ち相手の気持ちが理解できず、考えることができなくなってしまう」と言

葉のない世界を思い、その苦しさを綴る。

一方、T.K.さんは、言葉のない世界を「色がたくさんあって平和だと思う」とした。

私(大関)はI.R.さんの「せかされているように感じる」という感想にふれ、改めて考えることがあった。

すべてを言葉で表現できる人がいないことを考えると、自閉症を抱える方々とはまた違った形で、子どもたちが「言葉のない世界に似た状況」に立つことも少なくないのではないだろうか。言葉を育む中で、自らの思いを言葉にすることは決して簡単なことではない。だが、学校教育は時に、表面上の形式化した言葉を覚えること、使うことに注力する。学校の中でも「だれか知らないなにかにせかされている」状態、そのような「苦しみ」を感じている子は少なくないのではないか。そう考えると、改めてこれまで接してきた子どもたちを思い、私自身、自責の念を抱く。

「言葉のない世界」についての問い。それはもちろん、答えのある問いではない。ただ、その問いは、東田直樹の「生の感受」という位相にふれるため、言葉以前の世界にふれるため、子どもたちが「自己の生」や「言葉」について想いを巡らすために必要な問いだと思えた。

そこで、私たちは、第3時の授業において学級全体へと「言葉のない世界」について問いかけることにした。

第2時「感受性の地平へ～東田直樹の詩・散文に向き合って～」は、子どもたちそれぞれが、東田の内にある「詩が生まれる」位相にふれた。そして自らが「感じる」ことを大事にしながら、東田直樹の感受性の地平、「生の感受」という位相へと想いを巡らす時間になった。私たちは今、改めて子どもたちの感想文との対話を終え、そう考えているのだが、どうだろうか。

子どもたちの感想から、そのゆたかな想いを感じていただけたら幸いである。

5. 第三回目の授業

僕たちにとっての「言葉」

～言葉のない世界をめぐる～

第2時の10日後、2022年2月28日の3校時に、第3時の実践を行った。私たちは、第2時の子どもたちの感想文を読み、改めて第3時の教材研究に取り組んだ。以下、第3時の授業「僕たちにとっての『言葉』 ～言葉のない世界をめぐって～」についてみていきたい。

5. 1. 教材 東田直樹の詩・散文について

第3時では、第2時で配布した東田直樹の詩と散文、第2時における子どもたちの感想、東田の著書『自閉症のうた』から引用した散文の三つを教材とした。

まず、子どもたちに配布した第2時の感想文集の内容を記す。「4. 3.」の子どもたちの感想と重なる部分が多いが、子どもたちが実際に、授業中にふれた友達の感想であるため、重複するものもそのまま掲載する。

東田直樹 詩・散文を読んで 【二時間目の感想】

- ① 心に残った言葉は春の色は桜色です。この春の色という詩をえらんだ理由は、色の分け方かなんとなくおもしろいと思ったからです。T.H.
- ② 私は、自閉の人が、こんなにも辛く、がまんしていることが分かりました。一つ一つの言葉は、書いた人の気持ちがこめられていて、一人で自閉の人の文を書いたとは、思いませんでした。(中略) いろいろなできごとがあり、辛く、さびしいこともあったと思うのでむりせず、自分が正しいと思うことをしてほしいと思いました。Y.M.
- ③ いろいろな、そうぞうもできて、いろいろ考えて、春の色は、がんばる表現があり表現もふくまって分かりやすかった。H.M.
- ④ 東田直樹さんの詩を読んでいると心がおちつく。散文は直樹さんのいいたいことがすこしわかったきがした。T.Y.
- ⑤ とてもいい詩、散文だなと思いました。I.I.
- ⑥ 東田直樹さんが書いたいろいろな詩・散文を読

んで自閉しょうの人の見え方や思いが少しだけわかったような気がしました。東田直樹さんの詩の緑色という詩が心に残りました。O.S.

- ⑦ 東田さんの詩を読んで、一つ一つの詩がすごいなと思いました。一つ一つの言葉で気持ちが明るくなりました。K.A.
- ⑧ 自閉の人が見ている視点と普通の人との視点はちがうと思った。自閉の人にしか見えない世界もあると思った。考えていることや思っていることなどもちがうと思った。T.R.
- ⑨ 東田さんは光がすごく好きなんだなと思った。(中略) 自分に言葉がなかったらなにかを表現したり気持ちを表したりできないと思うからこのような詩を書けていてすごいなと思った。O.D.
- ⑩ だんだん自閉症になっている人の気持ちが分かってきた気がした。好きな色は青です。M.S.
- ⑪ 心に残った作品が二つあります。一つ目は、「僕が木だったら」です。自分が木だったら…なんてことはふつうの人は考えないと思うし、「この地球を綺麗に飾る」という言葉の「地球を」という言葉のところで一つ思ったことがあるからです。それは、「地球に飾る」ではなく「地球を飾る」にしていることです。地球全てを綺麗にしたい思いが伝わりました。S.Y.
- ⑫ 私は緑色という詩がいいなと思いました。緑色も好きなので、直樹さんは緑色が好きだったのかなと思いました。(中略) 直樹さんは、タイヤに見入ったのは、タイヤの形が印象的で美しかったのかなと思いました。H.N.
- ⑬ わたしがいいなと思った詩は、光の中へです。理由は、どうして、東田直樹さんの望む光は、永遠に存在しなくて、その光は、どんな光なんだろうと、思ったからです。H.Y.
- ⑭ とくに私が好きな詩は、「しずくが僕を包む時」です。自分の心の中や、雨、しずくの話が、と

でも関係していて、雨が好きなんだなあと思いました。また、自分のことや、相手のことを色で表しているのも、良いな、と思いました。人によって見た目や、性格がちがうからこそ、人のことを色で表すことができるのかなと思いました。U.M.

⑮ 私は、東田さんの詩と散文を読んで、一番心に残ったのは、「緑色」という詩です。私がこの詩を読んで、感じたのは、自分を自分が思うすてきな色で表しているのだということです。(中略) そうすれば、自分だけがとてもかがやいているようになるからです。回りから見たときは、どうであっても、自分は自分である。ということを知ってくれた気がします。O.S.

⑯ 東田直樹さんの考え方とか、思っていることとかの、世界かんががすごくいいなと思った。(中略) 「しずくが僕を包むとき」の僕と同じ言葉のない世界という言葉がすごく好きです。N.A.

⑰ 色々な詩を読んでとてもいいと思った文が「うきうきした音符」と言うところがよくて、雨が降ったときかさをひらいてかさにあたる雨が私にとってうきうきした音符と思いました。S.A.

⑱ 東田さんが書く詩・散文は東田さんだから書ける言葉があり、おもしろいと思いました。「僕が木だったら」の春夏秋冬いつも僕は緑色の部分で、木だったら枯れたり色が変わったりするのに、なぜいつも緑色なのか不思議に思いました。Y.R.

⑲ 自分のちがう世界で書いていると知り、ました。自閉症が光をじっと見るのは、見とれているか、遊んでいるかっていうのも知りました。私は、「しずくが僕を包む時」が好きです。(中略) 詩と散文を読んでみて、自分が知らなかったことや、見え方がぜんぜんちがうと分かりました。T.K.

⑳ しずくが僕を包む時の詩を読んで、私は「僕と同じ言葉のない世界」という文が、とても心に残りました。これを読んだ時、自分が思いをあ

らわせることができないから、こういう文を聞いたのかなと考えました。I.M.

㉑ ふしぎな感じがした。風の歌がいいなと思った。風の音を聞いたりしている時とかに、風の音だけじゃなくていろんな音が聞こえてくる。N.M.

㉒ 東田直樹さんの詩を読んで、自分では感じないなと思う言葉も多くあり、自閉しょうの方はこう感じているんだなと思いました。「風の歌」という詩がいいなと思いました。私も自然の音を聞くのが好きなので、なんか分かるなという気持ちで聞いていました。S.K.

㉓ 「大きな耳」という詩はとても印象に残り、最後の「地球の上にはたくさんの耳があるのにだれもが両手でふさいでいる、という文が気になり、たくさんの助けを求める声などがあるのにだれもが両手で耳をふさいでいるため、助けを求める声などが聞こえないので、世界はとても悲しいものなんだと感じ、強く印象に残りました。Y.R.

㉔ 詩や散文を読んで思ったことは、人の考えるちがう見えかた聞きかた思うことがちがうことがとてもいいと思ったし、不思議な考えだなあとも思う。詩を読んでいると最後に悲しいようなときがある。自分も詩と同じ感情になってくる。H.Y.

㉕ 「僕が木だったら」に出てくるフレーズで、「みんながほめてくれさえすれば、というフレーズが心に残りました。その後続く「僕の自慢の緑色でこの地球を綺麗に飾る。この二つのフレーズから「僕をほめてくれたらいいことするよ」と こんな風に感じました。A.K.

㉖ 東田直樹さんと私はすこし同じ似たような所があるかもしれないと思った。私が言葉の無い世界に産まれたらだれか知らないなにかに せかされているように感じると思います。I.R.

㉗ 言葉のない世界があったら、自分の気持ち相手の気持ちが理解できず、考えることができなく

なってしまうと思った。H.E.

- ② もし言葉がなかったら、色がたくさんあって平和だと思う。言葉はないけどきっとコミュニケーションはしぜんととれると思う。T.K.

次に、著書『自閉症のうた』に綴られた、東田の散文「僕たちにとっての「言葉」」を記す。全文ではなく、文章の一部を引用することで教材とした。

言葉が文章や思考を構築するための道具かと聞かれると、少し違うような気がします。

まず思いがあって、それを伝えるために、言葉があるのではないのでしょうか。

僕は、言葉をたくさん覚えたからといって、思いが育つわけではないと考えています。

確かに、言葉をたくさん知っている人の方が、自分の気持ちをうまく表現できると思います。けれども、たとえ言葉を知らなくても、思いは育つはずで

す。
嬉しい、悲しい、好き嫌いといった感情は誰もが持っているものですが、その時々^{うれ}の心の状態全部を言葉で表現できる人などいないでしょう。

心が育つということと、いつも楽しくなければいけない、すばらしい家庭でなければいけないこととは、それほど関係がないと思っています。心が育つために必要なのは、考える力を身につけること、さまざまな経験を通し自分の心と向き合う機会をつくることです。

自分の置かれている環境が幸せであれば、きっと前向きに生き続けることができるでしょう。だからといって、恵まれない環境では、心が育たないとは限りません。苦しんだり、悩んだりする中で人が成長することは、みんなが知っています。小石を投げた池に波紋が広がるように、何かが起きるたび心は揺り動かされ成長しています。

(東田,2017:p.29-30.)

言葉の世界において言葉をもたないということの厳しさ、苦しさ、その恐ろしさは、言葉をもつ人間の想像をはるかに越えることなのだと思う。

「言葉の海は、果てしなく広いのです。／この海の中で、自分の居場所を探しながら、僕は生きてい

きたいのです。」

(東田,2005b:p.91.)

果てしなく広い言葉の海の中で生きるということは、言葉をもたない方々にとっては、自らの心と生命がかかった日々なのかもしれない。教材研究を進める中で、私(大関)にはそのように思えた。ただ同時に、「4. 3.」でもふれたように、すべてを言葉で表現できる人がいないと考えると、自閉症ではない人にも、私にも、子どもたちにも、どこか通じる「苦しみ」があるのではないかとも思える。

「僕にとって言葉とは、青い海のようなものです。／みんなは、この海で自由に泳いだり、もぐったりして遊んでいますが、僕はいつまでも一人ぼっちで小舟に乗り、揺られ続けています。／周りには、いろいろな音の波が押し寄せて来ます。時に激しく、時にやさしい波にもまれながら、僕は小舟にしがみついているのです。もしも、小舟から落ちれば、溺れてしまうかもしれません。それは、自分を見失ってしまうほどの恐怖と絶望感です。」

(東田,2017:p.28.)

東田は「文字盤やパソコンをつかうことで、イルカになれた」と綴っている。東田にとって詩を書くことは、果てしなく広い「言葉の海」の中で、イルカという自己を得て、「自分の居場所」を求めることであり、新たな「自己」の創造、新たな「自己」と出会うことなのではないだろうか。詩を書くことで、そこに「自己の生」の実感が記され、自らの思いと、自らの言葉、「自己」を育んできた東田。言葉以前の思いの大切さについて、東田の実感をともなったこの散文を教材とすることで、子どもたちはよりゆたかに、自分たちにとっての「言葉」について想いを巡らせることができるのではないかと考えた。

そして、その上で、もう一度、第2時で教材とした詩と散文を読むことで、子どもたちは「生の感受」という位相にふれることができるのではないかと考えた。

5. 2. 授業の展開

2022年2月28日3校時、6年4組(出席者28名)において第三回目の授業を実施した。

授業開始前に歌を歌い終えた10:10。第2時の

子どもたちの感想をまとめたプリントを配布し、授業を始めた。

5分程度、一人一人が友達の感想を読んだ後、印象に残った感想について話し合った。

10：20、大関は番号②6 I.R.さんの「私が言葉の無い世界に産まれたらだれか知らないなにかに せかされているように感じます。」という感想、②7 H.E.さんの「言葉のない世界があったら、自分の気持ち相手の気持ちが理解できず、考えることができなくなってしまうと思った。」という感想、②8 T.K.さんの「もし言葉がなかったら、色がたくさんあって平和だと思う。言葉はないけどきっとコミュニケーションはしぜんととれると思う。」という3つの感想に着目し、3人の言葉から「どんなことを想像しますか」と、子どもたちに問いかけた。

全体で3人それぞれの話を聞いた後、近くの友達と自分が思うことを交流した。(子どもたちの想像については、「5. 3.」の子どもたちの感想文をお読みいただきたい。)



話し合いを終えた10：30、『自閉症のうた』から引用した東田の散文を配布し、朗読をした。

そして、最後にもう一度、大関が詩と散文を朗読し、子どもたちに感想を書いてもらった。

しかし、次の「5. 3.」の子どもたちの感想文からも分かるように、実際には、「生の感受」という位相にふれる、「感じる」ということよりも、「言葉」について省察を深める子どもたちが多く見られた。

東田の詩や散文は、「言葉」について深く省察することを促してくれる。また、子どもたちは、他の子どもたちの「言葉」についての省察に惹き付けられたのだと思われる。子どもたちは、そのことにとっても正直であったのではないだろうか。

その意味では、子どもたちは自らの想いを大事に、東田直樹や、ともに学ぶ友達と、「対話」を重ねた

といえるだろう。

5. 3. 第三回目の授業における感想文との対話

授業後に子どもたちの感想文を集めた。以下、授業を終えた今、改めて子どもたちの感想との対話をこころみたい。(以下、太字…子どもの感想、子どもたちの感想については、すべて「原文のママ」である。)

まず、「言葉のない世界」について書いた子どもたちの感想を引用する。

T.K.さんの感想

東田直樹さんが書いた。自閉症のうたで自分にもきょうかんできることがたくさんあると思った。自分も言葉は思いを伝えるためにあるものだと思います。ほかにも言葉をたくさんしていてもどのような気持ちになるのかわかっていなければ言葉の思いを本当はつたえきれていないと感じた。でも言葉が自分の気持ちをしってもらったためだったとしても言葉がなくても自分の気持ちはおおいにつたえられるきがする。なのでもし本当に言葉のないところが何年もつづいている場所があるのなら少しそこに産まれてもいいかなと思った。だけど言葉は「大事」だと思う。

T.K.さんは、言葉は思いを伝えるためにあるものだが、思いを本当はつたえきれていないと感じている。だがしかし、言葉がなくても気持ちは伝えられるとも考える。言葉のない世界に心ひかれる部分もあるが、やはり言葉は「大事」だと締めくくる。

T.K.さんは、自問自答の中で、言葉のない世界と言葉の世界を行き来する。その中で、自分たちにとって「言葉」とはどういうものなのか、真剣に考えているように思える。

I.R.さんの感想

私は、言葉が無かったらT.Kさんの「コミュニケーションはしぜんととれると思う」ということは本当だと思う。理由は人間と動物は言葉が繋がらないけど、人間がかなしんでいたりおこっていたりさびしがっていたりすると動物は、それぞれちがう反のうをとるからです。たぶん言葉はつうじないけどなにか動物にもかんじとることができるのでしょう。

H.Y.さんの感想

東田直樹さんの「自閉症のうた」を読んで思ったことは、心の状態を全部言葉で表現できる人などいないでしょうということで、たしかにそうだなとおもいました。私は、言葉があってもその人が言っていることがうそということもあるかもしれないと思ったので、言葉だけがすべてではないんじゃないのかとおもいました。

I.R.さんやH.Y.さんは、東田の「言葉」や「思い」、「心」についての文章と、これまでの生活体験から、「言葉だけがすべてではない」と考えている。I.R.さんは、動物とのふれあいの中で感じていることを綴っている。人間である自分や家族の感情の表出によって、動物の反応が違うことを例にあげている。授業中にも、何人かの子どもたちの話の中で、人間以外の生き物とのやりとりが話題にあがっていた。子どもたちは、家庭でともに暮らす動物とのやりとりという、自分の身近な体験を入り口に想像を広げていった。次のO.S.さんの感想文も、様々な生き物を例にあげ、言葉とは異なる地平におけるコミュニケーションについて考えた文章である。

O.S.さんの感想

私はもし、言葉のない世界にいたとしても、コミュニケーションはとれると思う。理由は、虫や動物だって言葉はない。でも、いかくしたり、一緒に遊んだり、逃げたり、追いかけていたりしているからだ。このような行動をとるのは、言葉がなくても、相手がどう思っているのか、自分がどう感じているから分かるからだと思う。例えば、カマキリは、おこると、いかくするし、ライオンとシマウマは、戦っているし、パンダの親子は遊んでいる。動物や虫がこうなのであれば、人間でもこのような行動ができるのだと思う。

これらの子どもたちの感想は、私たちが目指した「生の感受（第一の位相）」や、第2時において東田の言葉を読むことで子どもたちがふれた「詩が生まれる地平（第二の位相）」とも異なる。それは「言葉についての省察」という第三の位相といえるだろう。そして、第3時において展開していった子どもたちの学びは、まさにその位相が舞台となった。

次に、東田の言葉に共感する二人の感想を取り上げる。

N.A.さんの感想

みんなの考え方がすてきだなと思った。「自閉症のうた」の一部でも心が動かされた。みんなの考え方に、個性とか、性格が出てきていた。／自閉症のうたの「小石を投げた池に波紋が広がるように」という表し方がいいなと思った。共感できるところとか、すてきな考え方だなと思うところとか、どういことだろうとか、いろいろなことが頭にうかんできました。東田さんの考えていることを全部知りたいなと思いました。

U.M.さんの感想

みんなの感想を見て、こういうとらえ方もあるんだな、と思いました。人間一人一人考えることが違うから、たくさんを発見をすることができたのだと思います。もし言葉がない世界に私が置かれたら、自分の意見や思っていることが上手く伝わらずに、いやになってしまうと思います。東田さんが考えている、「言葉をたくさん覚えたからといって、思いが育つわけではない」というのは、強く印象に残り、なっとくしました。人間はたくさん体験をして、心や体が大きく育っていくと思ったからです。

友達の考えに、個性や性格の違いを感じるとともに、東田の「小石を投げた池に波紋が広がるように」という心の成長を描く表現にひかれ、考えをめぐらせたN.A.さん。U.M.さんは、言葉がなかったら「いやになってしまう」としながらも、「言葉をたくさん覚えたからといって、思いが育つわけではない」という東田の考えには共感し、言葉だけではなく、「体験」の必要性について綴っている。

子どもたちの多くは、言葉以前の地平、言葉の地平、いずれについても、その重要性を強く感じているようだった。

次に引用するO.S.さんは、「言葉がなかったら戦争やけんかなどが起きないな」と綴る。

O.S.さんの感想

みんなの感想をみて、もし言葉がなかったらという感じで感想をかいている人達がいてKさんの「色

がたくさんあって平和だと思う」という言葉が心に残りました。理由は、たしかに言葉がなかったら戦争やけんかなどが起きないと思ったからです。

言葉がなかったら、戦争やけんかなどが起きないというO.S.さん。ここでもう一度、「1.」で取り上げたメルロ＝ポンティの言葉を引用したい。

「われわれは、言葉が制度化している (être institué) 世界のなかに生きている。(中略) その根源にまで遡らないかぎり、言葉のざわめきの下にもう一ど始元の沈黙を見いだして来ないかぎり、この沈黙を破る所作を記述しないかぎり、われわれの人間観は、いつまでも皮相なものにとどまるであろう。」 (メルロ＝ポンティ, 訳, 1967:p.302.)

制度化された言葉の地平だけに立つのであれば、私たちに見えるのは大切な他者ではなく、対象化された何者かの表層ではないだろうか。そのような皮相的な関係においては、言葉はざわめきの中で争いの種にもなるだろう。

あわせて、中沢新一の著書『芸術人類学』から引用する。

「子供や詩人が語る個性的な言語ではなく、社会的な効用をそなえた言語では、あいまいさの除去がいろいろな場面で実行されています。(中略) こうして社会的あるいは父性的な言語によって徹底的に分離された世界では、逆に世界を対象として操作しようとする権力的な思考や心理が自然に発生してくることになります。」 (中沢, 2006:p.193.)

O.S.さんの考えを意味づけることはしないが、O.S.さんの感想を読んで、私(大関)自身が感じたのは、制度化された言葉が、他者を対象化し、操作しようとする心理へとつながっているのかもしれないということ。東田直樹が立っている「しずくが僕を包むとき／僕は自然と涙する／その時僕は雨になる／そして雨は僕になる」というような主-客の分離を越えた感受性の地平。その「生の感受」という根源を失った表層的な言葉は、O.S.さんの言うように、争いを生むのではないだろうか。言葉の根源を求めること、それは平和や他者を想うことともつながるのかもしれない。

東田の感受性にふれることで、他者の異なる感覚や意見をまっすぐに「尊重していきたい」と綴った

子もいた。

S.K.さんの感想

自閉症の方は、私たちと同じ風景、同じ物を見ていたとしても、私たちと同じようには感じないのかなと思いました。見方やとらえ方がちがうと、物の見え方も私たちとちがうのかなと思いました。／自分とはちがう意見も、否定せずに尊重していきたいなと思いました。

「言葉のない世界」という言葉以前の地平を想い描くことで、言葉について省察を重ねた子どもたち。子どもたちは、東田の世界にふれることで、日常生活では意識しない、感じることはないような、言葉の根源へと想いを巡らせていったように思える。

本時、東田直樹と子どもたち、あるいは子どもたち同士の間で、対話的に生まれていったこれらの学びは、子どもたち自身の「生の感受」とつながるものであるとともに、子どもたちの言葉を育むために価値あるものだったと考えるのだが、どうだろうか。

最後に、T.Y.さんの感想にふれて、子どもたちの感想との対話を終わりたい。

T.Y.さんの感想

東田直樹さんは地上のことか自然のことなどをはなしているんだと思う。東田直樹の詩や散文は、さいしょはあんまり理解ができなくて何がえると何となく分かってきて心がほっとすとゆうかスッカリして、ここちよいかんじがする。／詩や散文でいいなと思いました。

「ここちよいかんじがする。／詩や散文でいいな」と綴るT.Y.さん。学校教育において、言葉を取り扱うとき、まさに「取り扱う」というように指導するとき、あるいは教師がそのように言葉を使うとき、果たして、子どもたちの内に「ここちよいかんじ」は生まれるだろうか。

私は授業者として、授業をし、子どもたちと話し、感想を読むことをとおして、あるいは東田直樹の世界、言葉と向き合う中で、私たち教師にとっても、言葉以前の地平、言葉の生まれる地平へと想いを巡らすことが、必要なのではないかと感じた。言葉が「生の感受」と結ばれていてこそ、教師が言葉の生まれる地平へと想いを抱いていてこそ、子どもたち

の言葉はゆたかに育まれていくのではないだろうか。そして、そのような生きた言葉をとおり、自他の「苦しみ」や「生」にふれることで、子どもたちは「自己の生」を、よりゆたかに彩っていけるのではないだろうか。

第3時において、子どもたちは自らの想いを大事にしながら、東田直樹や、ともに学ぶ友達との対話をとおり、それぞれに自分たちにとっての「言葉」について深く考えることができたように思う。そして、その省察は、第1・2時における東田の言葉と結びつきながらも、より子どもたち一人一人、その子らしく、ゆたかに広がり深まっていくものだった。実践を終えた今、私たちはそう考えている。子どもたちの感想文から、子どもたちの学びのゆたかさが伝わったとしたら幸いである。

授業を終えて、半月。私（大関）は、6年生全員に向けて、次のような手紙を書いた。卒業式の前日、2022年3月17日、担任の先生方から子どもたちに渡し、手紙を配布していただき、本実践を終えた。

卒業生の皆さんへ

御卒業おめでとうございます。

先日は、授業をさせていただきありがとうございました。皆さんと貴重な時間を過ごすことができ、素敵な思い出になりました。

授業後に、皆さんの書いてくれた感想を何度も読みました。東田直樹さんや、東田さんの言葉と向き合う中で、一人一人が感じたこと、考えたことが、まっすぐに綴られていて、心が温かくなりました。最後に、お礼の気持ちを込めて、僕から詩を送ります。

「彩り」

君は 何色
「おはよう」の光

君は 何色
この暮れ行く空

君は 何色

あの涙の夜

ひらく 花びらに
永遠のよろこびが

ギターの響きに
世界のかがやきが

君は何色
いつかつないだあの子の手

君は何色
はるか銀河からふく風と

君は何色
あの日ころんだ傷あとも

遠く昔の森の奥
眠りにつくよ ミミズクと

君のひらく そのまぶたに
やさしく満ちる この光

君は何色

大関健一

皆さんの、新たな日々が「彩り」に満ちた幸多きものであることを、心から願っております。幸せな時間をありがとうございました。

このくらいはわかるでしょう
緑が いちばんきれいでしょ
だから 僕が緑色

東田直樹 詩「緑色」より

令和四年三月十七日
大関 健一

6. おわりにかえて：改めて「生の感受」とは

6. 1. 「風の歌」に誘われて小学一年生が綴った詩
私（青柳）は、大関が今回の授業を行った約一年前、宇都宮市立城東小学校からの依頼に応え、小学

一年生のクラス（二クラス）で「詩の授業」を行ったことがある。この時（'21.3.11.）の「詩の授業」の教材は、対象である一年生とほぼ同学年の子どもたちの詩を教材としたが、東田の「風の歌」をその中に織り込んだ。まず私が、教材とした9編の詩（その内の1編が「風の歌」）を読み聞かせ、次に子どもたち一人一人が気に入った詩を、友だちに読み聞かせる。この間、約30分間。そして、最後の10分程度で、子どもたち自身に詩を書いてもらった。

「風の歌」の人気は高く、子どもたち（二クラス合わせると71名）のほとんどが「気に入った詩」の一つとして手を挙げ、また友だちに読み聞かせる詩に「風の歌」を選ぶ子どもも少なくなかった。ここで、もう一度だけ、東田の「風の歌」を引きたい。

風の歌

そよ風が ふくと みんなが春を感じる
風は木々の間を走りぬけ
みんなは暖かさに ほっとする
どこかで鳥が鳴く時 人は木を見上げる
どこかで桜が散る時 人は風に気づく
風が聞いてほしいのは ずっと遠くの海の音
ふうわりそよふく風の中
静かに耳をすましてごらん
風が教えてくれるのは
みんなの知らない 海の音
静かな風の歌だから

ところで、私の授業の最後の詩を書く時間で、東田の「風の歌」に誘われて詩を綴った子が何人かいた。その中から、特に「風の歌」の「影響」が比較的に見えやすいものを4編紹介したい。

一年二組のH.K.君は、なかなか書くことが出来ず、ずっと紙は白いままだった。私が机に近づいていくと、「『風の歌』と同じ題名でもいい。まねをしてもいい？」と問いかけてきた。「もちろんいいよ」と応え返すと、H.K.君は次の詩を書き上げた。

かぜのうた

H.K. (1-2)

そよかぜかふくとみんなはふゆをかんじる
かぜは木のあいだをくぐりぬけるそしたらみんながすごく

ほっとするどこかでとりがなく時みんなは空を見上げる

どこかでさくらがちる時みんなはなつをかんじる
かぜがきいてほしいのはずっととおくの木の音

私は、上のH.K.君の詩を読んで感動した。句読点がなく、読みづらいかもしれないが、是非、注意深く読んでいただけたらと思う。また是非、東田の「風の歌」と比べていただけたらと思う。H.K.君は、東田の「風の歌」に誘われながら、同時に、自分自身の感じる世界（生）をここに表現していると感じ、とても感動した。

次に、同じ1年2組のI.Y.さんが書いた詩を紹介したい。

ゆれるさくら

I.Y. (1-2)

はるがくる、木にさくらがさく。
ほんのりびんくいろ。かぜは、さくらをゆらす。
だってかぜにも、気もちがあるから。きにささやくかぜ。
はっぱが、木をつつみこむ。はるには、さくらがいっぱいさく。
だってかぜがほんとうにかなでているおとがあるから。
それは、ゆれるさくら。のおと。

このI.Y.さんの詩にも感動した。I.Y.さんは「かぜがほんとうにかなでているおと」は、「ゆれるさくら」の音だという。ここには、東田の「風が聞いてほしいのは ずっと遠くの海の音」が飡していると思われる。ただ、飡しながらも、やはりI.Y.さん自身の感じている世界（生）がそこに表現されていることに感動する。

ところでまた、1年1組のI.M.さんは、東田の「風の歌」に誘われて、次の物語のような詩を書いている。

かぜのよううみ

I.M. (1-1)

わたしのいえはうみのちかくだった
ある日、わたしはそとにでてみると、わたしはいった「かぜのようゆれるうみはきれいだなあ」
おかあさんはいった、「よるのおかず、かっくてく

るね。」わたしはいった「きょうのおかずは、なんだろう。」

「あなたの好きなものかもしれないね。」

きょうもわたしはそとをながめた。

きょうもうみはきれいだった

すぐきれいだった。

海なし県（栃木県）に住んでいる者（大人、子ども）にとって、「風が聞いてほしいのは　ずっと遠くの海の音」から、ひときわ、郷愁に近いものをかきたてられるかもしれない。I.M.さんは、想像の中で、「かぜのよううみ」を見ている、というより、そこに住んでいる。ここにも、「風の歌」に誘われながらも、I.M.さん自身が感受した世界（生）が表現されている。

次の同じ1年1組のT.R.さんの詩「うめの花」は、「風」や「海」は出てこないが、「花を見る」あるいは「みんな」、という感覚は、やはり東田の「風の歌」に誘われて綴ったものであると思われる。

うめの花

T.R. (1-1)

赤いきれいなうめの花　うつくしくて、うめの花を見る。

みんなあたたかいおもいでみんながうめの花びらきれいだねと

うめの花にゆっている。みんながおうちにかえると、

みんなうめの花見てよかったとねがってうめの花もうれしいとおもっている。

私は特に、「みんながおうちにかえると、／みんなうめの花見てよかったとねがってうめの花もうれしいとおもっている」に感動した。特に「ねがって」という言葉に感動した。もしかしたら、「教師」としてこの詩を添削することを求められたら、例えば、「ねがって」を「おもって（思って）」とするよう指導してしまうかもしれない。ただ、私自身は、「おもって」ではなく、「ねがって」と綴っているところに、T.R.さん独自の「生の感受」を感じる。美しいものを見てよかったと「思う」、というより「願う」。その時、人は何を願っているのだろう。それは人それぞれだと思うのだが、とにかく、詩「うめの花」を綴ったT.R.さんには、「ねがう」という言葉を使

わざるを得ない「生の感受」があった（ある）と思われる。

以上の一年生の詩（4編）を見て分かるように、東田の詩「風の歌」は大きな喚起力をもっている。言い換えれば、東田の「生の感受」が、子どもたちの「生の感受」を引きだしていると言えるだろう。東田の「風の歌」は、もちろん、言葉で綴られている。しかし、その言葉に綴られる以前の、「生の感受」の位相を子どもたちは感じとっていると思われる。そして、上で述べたように、子どもたちの感じとっている「生」は、それぞれに東田とは異なる独自のものである。

ある人の「生の感受」は、言葉を介して、別の人の「生の感受」を呼び起こす。小学一年生の詩を読むとそれがよく分かる。しかし、ここで次の問いを問うてみたい。「生の感受（A）」が「生の感受（B）」を呼び起こすのは、AとBに共通した基盤（共同性）が、既に共有されているからなのか、と。最後に、本稿において何度か引いたメルロ＝ポンティの言葉を改めて振り返りながら、このことを考えてみたい。

6. 2. メルロ＝ポンティに則して／反して

東田直樹は、例えば「色」や「雨」や「空」を感受し、それらをめぐって詩を綴っている。そして、その詩を読むと、東田が、制度化された言葉を介してではなく、言葉以前で、「色」や「雨」や「空」を感受していることを感じる事が出来る。東田は、例えば詩「しずくが僕を包む時」の最終連で「しずくが僕を包むとき／僕は自然と涙する／その時僕は雨になる／そして雨は僕になる」と綴っている。これは、本稿で引いたように、メルロ＝ポンティが「私は、……空そのものである。私の意識はこの無限の青によって満たされる」と語る位相を表現していると言えるだろう。

しかし、ここであえて、メルロ＝ポンティの哲学（現象学）に、問いあるいは疑問を投げかけたい。まずメルロ＝ポンティの言葉を、少し長くなるが再度引きたい。

「…、どのようにして、また、なぜ赤が努力や暴力を意味し、緑が休息と平和を意味するのかを自問してはならない。学びなおさなければならないのは、われわれの身体がそれらの色を生きるとおりに、すなわち平和または暴力の凝結物として、それらの色を生きることである。赤はわれわれの反応の振幅を

増大するとわれわれが言うとき、そこでは赤の感覚と運動性反応というような二つの異なる事実が問題であるかのように考えてはならない——[そうではなく]赤は、われわれのまなざしが追い求めそして同化するその組成(きめ)によって、すでにわれわれの運動的存在の拡大であると考えなければならないのだ。感覚の主体は、或る性質を書きとめる思惟者でもなければ、それによって影響されまたは変化させられるといった無生氣な場でもなく、ある種の生存の場に、その場と共に生まれつき(co-naître)、あるいはこの場と共時化されている(se synchroniser)ところの、或る能力なのである。(メルロ＝ポンティ、訳、1974: p.14-5.)

上のメルロ＝ポンティの言葉は、やはり東田の「生の感受」と、その詩が表現しているものに符合しているとも思われる。東田は、まさに「緑」や「赤」という「色」を生きている。そして、東田が、例えば詩「春の色」の中で「輝くのは 緑／みんなの両手の色だから」と「緑色」をたたえる時、私たちはその感性に納得、共感できるように思われる。そしてメルロ＝ポンティは、そのように「納得、共感」できる理由を次のように説明していると言える。例えば、信号機の場合、「赤」は「止まれ」を意味しているが、「赤」という色そのものに「止まれ」という意味があるのではなく、それはルールによって決められているからである。これにならって、色そのものに意味があるわけではない、と考えることが出来る。しかし、このような考え方が、メルロ＝ポンティが批判する「赤の感覚と運動性反応というような異なる二つの事実」がある、という考え方である。

こうした考え方に対して、メルロ＝ポンティは、それぞれの「色」には「われわれ」が共有している本来の意味がある、と主張していると言える。メルロ＝ポンティによれば、われわれが共に生きている(運動している)場の中で、「色」の意味は共に生きられ、言葉以前の位相において共有されている、ということだろう。だからこそ、東田の、「輝くのは 緑／みんなの 両手の色だから」という言葉(詩)に納得、共感できるのだと。しかし、これは本当だろうか。

メルロ＝ポンティの思想を端的に言えば、言葉以前のわれわれの「生」は共同的なものである(「つまり、感覚は文字どおりコミュニオン[聖体拝領＝

共生]にほかならない)、ということである。しかし、東田によって綴られた詩や散文に向き合う時、果たして、言葉以前の「生」が共同的であると言えるだろうか。もちろん、東田の場合、その言葉以前の「生」は(も)、(DVDを見るとよく分かるように)家族の愛に包まれ、言葉以前の「喜び」「悲しみ」をわかしあっているとも言える。しかし敢えて言えば、その「喜び」や「悲しみ」の意味は、例えば母子間においても異なるものではないだろうか。

東田は、特にその詩の中で、苦しみも綴っていた。詩「しずくが僕を包む時」の冒頭は「どうしようもなく寂しくて／好きな音楽に身をゆだねる／僕と同じ言葉のない世界」ではじまる。これは感傷ではないだろう。「言葉のない世界」は、共同的な世界では決してなく、むしろろうじて言葉が共同的な感覚を生み出すのではないだろうか。そして、このことは、本稿の「2. 2.」で論じたように、障害を持っているかどうかに係わらない「生」の事実(普遍的な「苦しみ」)ではないだろうか。でも、だからこそ、一人一人の「生」はゆたかであるということ。また、だからこそ、一人一人の「生」は寂しいということ。

東田は、詩「光の中へ」の最終連で「どこにでも光はあるのに／僕が望む 真実の光は／永遠に／存在しない」と綴っている。これも、感傷ではないだろう。ある意味で、東田のいう「真実の光」とは、メルロ＝ポンティがその思想の基盤としている「共同性」を指していると思われる。しかし、言葉以前の「生」に、「真実の光」はない。しかし、「真実の光＝共同性」がないからこそ、東田は、「生」の中で感受したことを言葉に綴り、私たち一人一人に差し込もうとしているのではないだろうか。東田は、「輝くのは 緑／みんなの 両手の色だから」と綴っていた。改めて、前半の「輝くのは 緑」に納得、共感することはすぐに出来そうでも、後半の「みんなの 両手の色だから」はどうだろうか。みんなの両手の色を「緑色」と感じるの、そこに東田の独自の想いが差しのべられているからではないだろうか。そしてもちろん、メルロ＝ポンティならば、そのように考えることが出来るのは、やはり生が共同的(コミュニオン[聖体拝領＝共生])だからである、と言うだろうが。

ところで、「4. 3.」に掲げた感想の中で、例えば、T.K.さんは次のように綴っていた。

もし言葉がなかったら、色がたくさんあって平和だと思う。言葉はないけどきっとコミュニケーションはしぜんととれると思う。

そして、上のT.K.さんの文章を読んだI.R.さんは、次の文章（「5. 3.」）を綴っていた。

私は、言葉が無かったらT.K.さんの「コミュニケーションはしぜんととれると思う」ということは本当だと思う。理由は人間と動物は言葉がつかないけど、人間がかなしんでいたりおこっていたりさびしがっていたりすると動物は、それぞれちがう反のうをとるからです。たぶん言葉はつうじないけどなにか動物にもかんじとることができるのでしょう。

I.R.さんの考えやT.K.さんの考え（「もし言葉がなかったら、色がたくさんあって平和だと思う」）は、メルロ＝ポンティの思想とほぼ同じだと思われる。確かに、言葉が制度化され、感受性と切り離されて使われている世界よりも、言葉のない世界の方が、人と人（あるいは人と動物）は共同性に近づくのではないか、ということ。しかしまた、T.K.さんは、自らの意見をふまえた上で（「5. 3.」で）、「ただ言葉は「大事」だと思う」と綴っていた。

言葉が制度化された世界の中では、私たち一人一人は「生の感受」から切り離されている。私たちは、言葉にだまされて言い争っているのかもしれない。だから、言葉以前の世界（生の感受）に遡ることが求められる。ただ、「生の感受」＝「共同性」、ではない。一人一人の生の感受には、寂しさ、苦しさがある。だから、一人一人は、「生」を感受した上で、それを「言葉」にしようとする。東田のように、「真実の光」を求めて。私たちは、メルロ＝ポンティに則して／反して、「生の感受」と「言葉」の関係性をこのように考えるのだけれどだろうか。

最後に、もう一度、東田の詩に誘われて綴られた一年生の詩、そして本稿で掲げた六年生の様々な感想を読んでいただければと思う。子どもたちは、東田の生の世界に誘われながらも、それぞれに、独自の生を感受していると言えるのではないだろうか。他者の「生の感受」に誘われながらも（他者の苦しみを感受することも含め）、自身の「生の感受」を生みだしていく。そこに私たちの「生」のゆたかさ

があるのではないだろうか。東田の詩と散文は、そのような意味での「生の感受」へ向けて、私たち（子どもたち、大人たち）を無限に誘っていると思うのだけれどだろうか。

注

1. 私たちは、これまで、詩、言葉、命、自己の生、生と死の教育について考察を重ね、また、授業実践をこころみてきた。その記録として（青柳, 2015; 青柳, 2017; 青柳, 2018a; 青柳, 2018b; 青柳, 2019; 青柳, 2021a; 青柳, 2021b; 大関・青柳, 2019a; 大関・青柳, 2019b; 大関・青柳, 2020a; 大関・青柳, 2020b; 大関・青柳, 2021a; 大関・青柳, 2021b; 大関・青柳, 2022）を是非、参照いただきたい。

参考文献

- 青柳宏（2015）. ことばを育むために：M. メルロ＝ポンティの初期言語論の視界から．（『宇都宮大学教育学部紀要』第65号 第1部）
- 青柳宏（2017）. ことばを育むために（その二）：M. ハイデガーの言語論の視界から．（『宇都宮大学教育学部紀要』第67号 第1部）
- 青柳宏（2018a）. 「生と死の教育」を問いなおす：宮沢賢治とエマニュエル・レヴィナスの視界から．（『宇都宮大学教育学部紀要』第68号 第1部）
- 青柳宏（2018b）. 「ともだち」をめぐる道徳授業の対話的展開：詩から対話へ、対話から詩へ．（『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第5号）
- 青柳宏（2019）. ことばを育むために（その三）：エマニュエル・レヴィナスの言語論の視界から．（『宇都宮大学教育学部紀要』第69号 第1部）
- 青柳宏（2021a）. ことばを育むために（その四）：J. デリダとE. レヴィナスの思想を比較しながら．（『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第71号）
- 青柳宏（2021b）. 感受性を育むために：「詩の授業」を通して．（『下野教育』令和3年11月号〔No.768〕 栃木県連合教育会）
- 東田直樹（2005a）. この地球にすんでいる僕の仲間たちへ：12歳の僕が知っている自閉の世界。エスコアール
- 東田直樹（2005b）. みんなの知らない海の音：驚異の13歳、初詩集。朝日新聞社
- 東田直樹（2008）. 自閉症の僕が残してきた言葉た

ち、エスコアール

東田直樹 (2014). ありがとうは僕の耳にこだまする. 角川書店

東田直樹 (2017). 自閉症のうた. 角川書店

東田直樹 (2020). 自閉症の僕が生きていく風景. 角川文庫

ユング, C.G (1970). (高橋義孝・江野専次郎・訳) ユング著作集 2 現代人のたましい. 日本教文社 [原著初版は1931年]

メルロ＝ポンティ, M (1967). (竹内芳郎・小木貞孝・訳) 知覚の現象学1. みすず書房 [原著初版は1945年]

メルロ＝ポンティ, M (1974). (竹内芳郎・木田元・宮本忠雄・訳) 知覚の現象学2. みすず書房 [原著初版は1945年]

中沢新一 (2006). 芸術人類学. みすず書房

大関健一・青柳宏 (2019a). 「命」をめぐる授業：宮沢賢治との対話を通して. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)

大関健一・青柳宏 (2019b). 「与え」をめぐる授業：贈与の哲学と間主観的アプローチを基に. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)

大関健一・青柳宏 (2020a). 「他者の死」と共に生きる「生と死の教育」：宮沢賢治の「春と修羅」「銀河鉄道の夜」をめぐる. (『宇都宮大学教育学部紀要』第70号 第1部)

大関健一・青柳宏 (2020b). 他者の生命にふれる「生と死の教育」―矢沢幸との対話を通して. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第7号)

大関健一・青柳宏 (2021a). 立松和平の「いのち」の思想：「いのち」をめぐる教材研究のこころみ. (『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第71号)

大関健一・青柳宏 (2021b). 宮沢賢治の「永訣の朝」をめぐる授業：賢治とトシとの対話を通して. (『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』第8号)

大関健一・青柳宏 (2022). 臨床の地平からみた人間形成：矢沢幸の足跡を辿って. (『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第72号)

*冒頭に記したように、今回、授業者である私（大関）は、真岡市立真岡西小学校の6年4組において実践をさせていただきました。本実践、三時間の授業の実施について御快諾くださった、真岡市立真岡西小学校校長・大越武先生をはじめ、実践

について御理解いただき、快く御協力くださった担任である田村翔太先生には大変お世話になりました。また、卒業を間近に控えた時期にもかかわらず、東田直樹の言葉に向き合い、自分の想いを綴ってくれた子どもたち。子どもたちと共に学んだ時間は、私にとって学び多きものでした。先生方と子どもたちに、心より感謝申し上げます。ゆたかな学びの機会を、ありがとうございました。

令和4年4月1日受理

In Search of the Sensing (Suffering) of the Life: Lessons on Naoki Higashida's poetry and prose

Kenichi OZEKI and Hiroshi AOYAGI